

Title	アフリカの王権と祭祀の研究：政治人類学の視点
Sub Title	
Author	阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005. ) ,p.237- 248
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0237">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0237</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

との関連が本論で十分に考察されているのか等の諸点でも今後の課題が残されている。

(b) 調査方法論に関しては、対話的手法によるインタビュー調査を中心にそれらの資料についての「意味解釈法」の手法を基礎にしているが、調査法における「信頼性」や「妥当性」、そして「批判的討議」の問題等についても、より以上に言及しておいた方がよかったのではないかと、個人誌的なアプローチに重点をおいているところからひとりの人間の生涯にわたる「生の意味地平」や意識をより深く、より広範に感受し抽出していく方法はどのように可能なのか、ライフストーリーをライフヒストリーへどのように展開していくのか、人間の生をめぐるミクロな作業、メゾ・レベルの作業、マクロな作業をどのように連環させていくのか、量的調査との関係や同じテーマを扱っている既存調査資料との関連考察などの諸点も問題点であり今後の大きな課題でもある。これからの研究の一層の発展を期待するものである。

#### IV. 結論

以上、本論文の内容の審査を通じて、われわれ審査員は、小倉康嗣君に博士（社会学）の学位を授与することが適当である、と判断する。

### 博士（社会学）[平成 17 年 2 月 26 日]

乙 第 3902 号 阿久津昌三

#### アフリカの王権と祭祀の研究—政治人類学の視点—

##### [論文審査担当者]

主査	慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員 社会学博士	関根 政美
副査	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木 正崇
副査	名古屋大学大学院文学研究科教授 社会学博士	和崎 春日

##### [学識確認担当者]

	慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員 法学博士	霜野 壽亮
	慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員 社会学博士	関根 政美

#### 内容の要旨

本論文は、アフリカ諸社会との「比較」という観点から、王権と祭祀に関する社会人類学的な研究をまとめるという作業を通して、アサンテの民族誌を記述しようとするものである。本論文では、「都市」「ジェンダー」「国家」「政治」「儀礼」「文化表象」という主題のもとに、アサンテの王権と祭祀について政治人類学の視点から多次的、多領域的な視点から記述したものである。フィールドワークでは、これらの主題をもとに調査・研究をするために、1981年以來、数年間単位で年次計画を立案して、文部科

学省科学研究費（国際学術調査）等の補助金をうけて、西アフリカ、ガーナ共和国南部に生活するアサンテを対象として調査・研究をおこない、学会等で研究発表をおこない、論文を執筆してきた。

本論文は、次のような構成からなる。

はじめに

## 第1章 王権の基礎構造

### 第1節 アフリカの都市

### 第2節 王都の構造

### 第3節 アフリカの都市と国家

### 第4節 アサンテ王国の成立と展開

## 第2章 王位継承の方式

### 第1節 王の中心性—聖性と呪力

### 第2節 王位継承の系譜

### 第3節 王母の地位

### 第4節 血の匂いが好きな女神

### 第5節 王母の権限

## 第3章 王権の儀礼

### 第1節 時と暦

### 第2節 王権と暦

### 第3節 葬儀と即位式

### 第4節 葬儀の政治学

### 第5節 儀礼的殺害の論理

## 第4章 王権の標章

### 第1節 文化領域と物質文化

### 第2節 境界を侵犯する動物

### 第3節 祝祭と王権

### 第4節 王権の象徴性

あとがき

第1章「王権の構造」第1節「アフリカの都市」1.1「都市の類型」では、都市人類学者サウゾールの都市の類型にもとづいて、本論文の主たる対象であるアサンテの王都クマンシの都市的布置関係を明らかにするために必要な基礎情報を提供するところにある。1.2「地域の構造」では、都市社会学における都市・村落関係の概念とは異なり、「都市・村落の秩序」として地域の構造を解釈することの必要性を論じ、1.3「集落語彙」では都市・村落関係をめぐる集落語彙について分析して、王権性という固有の地域概念を抽出する。1.4「市壁をもつ王都と市壁をもたない王都」では、市壁をもつのかもたないのかという王都の類型を試みた。1.5「王都と商都」では王都との対立概念である商都について述べた。

第2節「王都の構造」2.1「王都の宇宙論」ではライデン学派の王都の宇宙論的解釈について述べ、2.2「神々の体系の模倣」では、ウィーン学派の系譜にあるハイネ＝ゲルデルンの「東南アジアにおける国家

と王権の概念」にふれて王権の宇宙論的解釈に展開させた。これは、2.3「劇場国家とマンダラ国家」においてギアツとタンバイアの国家モデルに展開させた。2.4「テンコドゴ（モシ）」、2.5「フンバン（バムン）」、2.6「レイ（レイ・ブーバ）」、2.7「アイエドゥン（ヨルバ）」、2.8「クマシ（アサンテ）」では、王の中心性、王都の中心性について論述した。

第3節「アフリカの都市と国家」3.1「陸地史観と海洋史観」では、フェルナン・ブローデルの『地中海』以後の世界システム論-生態史観・唯物史観などの「陸地史観」から世界を多島海という視点から認識する「海洋史観」への転換についてとりあげた。3.2「『海』と『縁』—都市の誕生」では、環地中海世界、環インド洋世界、環大西洋世界との交流という視点でアフリカの都市を位置づけた。これは第1節1.1「都市の類型」に世界システム論という新たな視点を導入したものである。西アフリカ内陸部に栄えた広域支配の王国群はサハラ砂漠という「砂の海」（ラクダという「砂漠の船」）を中心として栄えたが、14世紀から15世紀にかけて、これらの王国群とは異なるタイプの王国群や都市がギニア湾沿岸部に誕生した。3.3「森林の王国群」では、アサンテ王国の誕生以前に成立したアカン系の王国群について記述した後に、アサンテ、ダホメー、ヨルバなどの森林地帯の王国群について述べた。3.4「国家形成の基盤—鉄砲伝来」では、ジャック・グディの「生産手段」と「破壊手段」という概念にもとづいて、特に、内陸サバンナ地帯では「馬」が、ギニア湾沿岸部の森林地帯では「鉄砲」が国家形成において重要な役割をはたしたことについて述べた。特に、アサンテについては鉄砲のはたす役割について詳細に論述した。3.5「ジハード史観 vs. 交易ネットワーク論」では、西アフリカのイスラーム史に関する嶋田義仁と竹沢尚一郎との論争を中心に、西アフリカの中世イスラーム国家の成立と展開について論述した。3.6「サハラ南縁の都市と国家」では、第1節1.5「王都と商都」の類型を歴史的記述に展開させた。3.7「ゴンジャ王国」では、中世イスラーム国家とは異なる近代世界システムのなかでギニア・サバンナ地帯に発達した近代イスラーム国家としてのゴンジャ王国をとりあげた。3.8「サラガ」では、ゴンジャ王国の中心的な交易都市サラガについて論述した。原理」と「女性原理」に対応するのかを述べた。アサンテにおける女の力は「血」の原理を媒介とした儀礼的な側面によるものであること。その「力」の根源は、大地、豊穡、呪術、祖先、血、女という儀礼的な相互の連関のなかにみられることを論述した。

第4節「アサンテ王国の成立と展開」は、第1節から第3節までのアフリカ諸王国の形成と展開を受けて論述したもので、4.1「農耕文化論」では、中尾佐助の『栽培植物と農耕の起源』から、サバンナ農耕文化と根栽農耕文化について比較をおこなった。4.2「森林の狩猟国家」は、3.4「国家形成の基盤—鉄砲伝来」で試みた「破壊手段」として鉄砲という観点を「生産手段」としての農耕という観点から国家形成の基盤について論述した。ここではサバンナ農耕文化と森林農耕文化との比較という視点から「森林の狩猟国家」（グディ）について論述した。4.3「『狩人』伝説」では、アサンテの起源神話に登場する「狩人」伝説について述べた。西アフリカでは「狩人」伝説は広く伝承する起源神話であるが、アサンテにおいてもオジュラ祭という新年の儀礼において王が「狩人」の衣裳をまもって登場する。これは演劇論的な意味では起源神話の再現を表すものである。4.4「母系の神々—開闢の系譜」では、アサンテにおける母系の神々の系譜について述べ、4.5「集落の発展過程—権力の再配分」では、アサンテの口頭伝承の資料にもとづいて、集落を分析することで、王国の形成と展開について述べた。

第2章「王位継承の方式」第1節「王の中心性—聖性と呪力」1.1「秩序と混沌」、1.2「空間の秩序」、1.3「時間の秩序」では、「空間」と「時間」における秩序と混沌について論じた。1.4「神聖王」、1.5「『王殺し』の慣行」では、フレーザーの『金枝篇』以来の主題である「神聖王」「王殺し」について、シルッ

ク、ディンカ、ジュクンなどの事例を中心に論述した。1.6「『偽の王』」、1.7「外来王」では、偽の王、外来王についても事例をとりあげて論述したが、「神聖王」から「外来王」までの記述は「王権」の学説史として読めるようになってい

第2節「王位継承の系譜」2.1「王位継承のモデル」では、グディの王位継承モデルをもとに、モシ=マンブルシ、ゴンジャ、北アイルランド等の事例をとりあげて、アサンテの事例においては別の視点が必要であることを述べた。2.2「王と王母の継承方式」はアサンテの王位継承を分析するためのものである。そのためにはジェンダーの視点を取り入れることが必要であり、2.3「ジェンダー・スタディーズ」、2.4「男性の偏見（あるいは男性観察者の眼）」、2.5「女性の劣位」では、アフリカ諸社会の女性の地位についてジェンダー研究の課題と展望について論述した。つまり、ジェンダーの視点から王権研究における「男性」中心史観を超えるために、2.6「王妃と王女」、2.7「女性婚」、2.8「王母の比較」において、王妃、王女、王母の事例をとりあげて「女性」中心史観の模索を試みた。「女性」を中心にすることで王位継承の方式がどのように再構築されるのかを検討するためである。ここにも「王権」の学説史を読みとれる。

第3節「王母の地位」3.1「王母の系譜」、3.2「王母の結婚」、3.3「王母の呪力」では、王母の系譜、王母の結婚、王母の呪力という観点から女性の地位について論述した。王母位の継承方式は、基本的には、直系=垂直（母子）型をとっている。王母の結婚は、王族の家系を存続させるためのものと王位継承のためのものがある。また、女性の出産と豊穰性が結びついて王母が王権をうみだす装置として機能している。

第4節「血の匂いが好きな女神」4.1「汚穢と禁忌」では、月経と出産をめぐるシンボリズムについて民族誌の記述を検討した。4.2「精液と血液—『白』と『赤』の象徴的表現」では、「白」と「赤」の色彩のシンボリズムを検討することで、精液と血液を媒介としてどのような「男性原理」と「女性原理」に対応するのかを述べた。アサンテにおける女の力は「血」の原理を媒介とした儀礼的な側面によるものであること。その「力」の根源は、大地、豊穰、呪術、祖先、血、女という儀礼的な相互の連関のなかにみられることを論述した。4.3「性の禁止事項—人間、空間、動物の分類体系との関連から」では、性の禁止事項について検討して、「モジャ」が「母系的な族外婚の規則」によって支配的な統合の原理となっているのに対して、「ントロ」は「自分を殺す規則」によって道義的な統合の原理を形成していることを述べた。構造的には劣位にあるものが道義的、儀礼的には優位であることによって、政治的な領域では聖なる力があると認められると解釈した。

第5節「王母の法廷」5.1「王母の権限」、5.2「法廷の構成」、5.3「言語と〈権力作用〉」は、王母が実際に法廷において女性の問題をどのように調停するのかを最近の研究から紹介したものである。王の法廷では相続と継承などの国家的領域を扱うのに対して、王母の法廷では結婚、離婚、邪術などの家政的領域を扱うことが明確となった。これらは政治人類学の新たな研究領域となるであろう。

第3章「王権の儀礼」第1節「時と暦」1.1「生態的な時間と構造的な時間」、1.2「円環的な時間と振動する時間」では、デュルケーム以来の時間概念、特に、エヴァンズ=プリチャード、リーチ、エリアーデの時間論について述べた。1.3「時間を測る」では、フォーテス、グディなどの時間論を検討して、「生物時計」「自然現象」「花時計」「牛時計」など諸民族によって異なるが、「月」と「年」の単位は、季節的な循環に組みこまれた分節と分節に結びついている。

第2節「王権と暦」2.1「時間の概念化」では、(a) 時間の参照体系—自然的現象と人間的現象、(b) 生

態的な時間、(c) 生活暦の項目について、アサンテではどのように時間を概念化するのかを論述した。2.2「アカン暦」では、6日の「週」と7日の「週」とを組み合わせた「アグドゥアナン」と呼ばれるアカン暦について記述した。2.3「オジュラ儀礼」では、季節のサイクルにおいて文化的に規定された時点の、雨季と乾季の移り変わりにおいて開催されるオジュラ儀礼の意味について述べた。2.4「『過去』『現在』『未来』」では、ムビティの時間論との関係で、アサンテの「時間」の観念について論述した。アカンでは「過去」「現在」「未来」という直線的な時間の観念があるが、「過去」には「遠隔過去」「過去」「近接過去」という三つの諸相があるが、「過去」は、例えば、祭りの出来事を起点として、ある祭りの「前」か「後」によって分節化されること。また、アカンの時間の観念には「運動」がともなっているという特徴を論じた。2.5「暦の管理」では、王権と暦との関係について述べた。2.6「時間の空間化」では、「運動」概念との関わりで、日の出から日の入までの通常で歩く距離という空間的なものを基準として時間を測る方式について述べた。2.7「王都と『暦』」では、王都を中心とする時間と空間について論述した。どの階層が時間をより一般的には度量衡を含めた尺度をどのように征服し支配したかは王権の支配構造と関わる重要な問題である。

第3節「葬儀と即位式」3.1「王位継承の諸相」では、王位継承の方式について述べ、王朝の系譜関係について記述した。3.2「王と王母の在位年数」では、歴史学の資料にもとづいて、王と王母の在位年数について記述した。3.3「『王の死』の隠喩」では、「王の死」に関しては植物隠喩系の慣用句が使われることとその宇宙論的な意味について論述した。3.4「王の死因」では、王の死因について記述した。3.5「死体の二次埋葬と生贄」では、王の死後、王の政治的身体がどのように処理されるのか、また、王の死にとまなう生贄について記述した。3.6「葬儀と即位式の選日」では、歴史学の資料をもとに、王の葬儀から即位式までの王位継承のメカニズムについて論じた。

第4節「葬儀の政治学」は、第3節「葬儀と即位式」が歴史的な資料にもとづいたものであるのに対して、民族誌的に資料にもとづいたものであるという意味で対称的なものである。また、本節によってアサンテの民族誌の全体像が描けるようになった。4.1「生と死の再生」では、死の人類学的研究について論じた。4.2「民族誌のなかの葬儀」では、(a) 生と死の世界、(b) 悲しみの表現、(c) 遺体の処理、(d)「髪」の神秘性、(e) 王の葬儀について、民族誌のなかではどのように記述されているのかについて論じた。4.3「実践のなかでの葬儀」では、1999年2月25日に崩御したオポク・ワレ2世の葬儀がどのように執行されたのかを論じた。(a)「王の死」と「死の知らせ」、(b) 死せる身体と政治的身体、(c) 葬儀とドレスコード、(d) 通夜と遺体安置、(e) 市場と混沌、(f) 新しい王の選出という項目について論述した。4.4「葬儀と即位」では、(a) 暦と選日、(b) 王の選出から王の襲名まで、(c) 王の誕生と「王の母」、(d) 王位に就くという王位継承のプロセスについて論述した。

第5節「儀礼的殺害の論理」5.1「社会人類学と犠牲論」では、社会人類学における犠牲研究について、5.2「動物と人間の犠牲」では、ルネ・ジラルールの犠牲論について概略した。5.3「『人間の犠牲』の神話」では、アサンテの民族誌のなかで記述されている生贄について記述した。5.4「犠牲の解釈」では、「犠牲にすること」「犠牲行為」「犠牲の対象」の意味論的な解釈をおこない、「人間の犠牲」という神話は「未開」「野蛮」という他者像を創造することでイギリスの植民地政策のための政治的道具として利用されたことを論じた。

第4章「王権の標章」第1節「文化領域と物質文化」では、森林地帯のアサンテの事例を中心として、サバンナ地帯のモシ、ダゴンバ、マンブルシ、カセナ、ゴンジャ、ギニア湾沿岸部のエウェ、ガなどを

とりあげ、文化領域を設定するための指標としての「楽器」と神聖なる王権をはじめとする政治システムとの関わりを論じるための枠組を提示した。1.1「文化領域と楽器」、1.2「音の出るヒョウタン」、1.3「王の鐘」、1.4「歴史を語る太鼓」という項目について、王権と物質文化—特に「楽器」について論述した。

第2節「境界を侵犯する動物」では、アフリカにおける視覚芸術をとりあげることによって、特に、その図像的表現と説話的表現のなかに登場する動物の存在に着目することで、言語と図像とを媒介とする〈もの〉を語る民俗の想像力、あるいは〈語り〉の共犯関係の深層構造について論述した。2.1「文字コミュニケーションと非文字コミュニケーション」、2.2「動物の民俗分類」、2.3「家の動物と森の動物」—(a) 家の動物、(b) 森の動物、2.4「越境する動物」—(a) 不思議な動物、(b) 蛇と鱉と鯨、(c) トリックスター、2.5「動物のイメージと図像」。王権の標章のなかでも動物にテーマをしぼったもので、アサンテ、ベニン、ヨルバなどの王権のシンボリズムについて論述した。

第3節「祝祭と王権」3.1「オジュラ祭」、3.2「『生』と『死』の循環」では、第3章「王権の儀礼」第2節「王権と暦」2.3「オジュラ儀礼」を物質文化—特に、王権の標章という観点から論述したものである。

第4節「王権の象徴性」では、4.1「王の椅子」、4.2「日傘」、4.3「語り部の杖」、4.4「儀礼用刀剣」、4.5「布と衣裳」という項目について論述した。

## 論文審査報告書の要旨

### (I) 論文の構成

阿久津昌三君（信州大学教育学部助教授）が、慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出した博士学位請求論文「アフリカの王権と祭祀の研究—政治人類学の視点—」の構成は次のとおりである。

はじめに

#### 第1章 王権の基礎構造

第1節 アフリカの都市

第2節 王都の構造

第3節 アフリカの都市と国家

第4節 アサンテ王国の成立と展開

#### 第2章 王位継承の方式

第1節 王の中心性—聖性と呪力

第2節 王位継承の系譜

第3節 王母の地位

第4節 血の匂いが好きな女神

第5節 王母の権限

#### 第3章 王権の儀礼

第1節 時と暦

第2節 王権と暦

第3節 葬儀と即位式

## 第4節 葬儀の政治学

## 第5節 儀礼的殺害の論理

## 第4章 王権の標章

## 第1節 文化領域と物質文化

## 第2節 境界を侵犯する動物

## 第3節 祝祭と王権

## 第4節 王権の象徴性

## あとがき・参考文献

学位請求論文には多くの地図、写真などの図版が挿入されてはいるが、脚注を含めた本文は、400字詰め原稿用紙に換算して1,200枚ほどであり、A4版横書きの論文は全体で500頁を超える大部のものである。論文博士学位請求論文としては十分な分量である。

## 〔II〕 内容の要旨

## (1) はじめに

「はじめに」では、まず、フレーザーの『金枝篇』以来、アフリカの王権に関する英国社会人類学的研究の歴史が要約的に紹介され、本研究がその伝統の延長上にあることが示唆される。とくにR・S・ラットレーとK・A・ブシアのアサンテ研究の蓄積の上に立つことが明らかにされる。次に、本研究では、西アフリカ、ガーナ共和国のアサンテ王国とその王都クマシを中心に、王権と祭祀の関係が多角的に記述・分析されると同時に、幅広くアフリカ各地の事例研究が引用され、アフリカの王権と祭祀の関係が詳細に論じられることが予告される。最後に、博士学位請求論文提出までの本人の研究履歴が紹介される。

## (2) 第1章「王権の構造」

本章では、西アフリカ、ガーナ共和国南部のアサンテ社会（英語圏ではアシャンティとされるが、現地では民族のアイデンティティを表現するためアサンテが使用される。アシャンティは州名となっている）の王都クマシに焦点が当てられ、アサンテを中心とするアフリカの王国と王都、王都を中心とした地域構造の特色が論じられる。

第1節「アフリカの都市」では、まず、都市人類学サウゾールの都市の類型論に基づいて、アサンテの王都クマシの都市的布置関係が明らかにされる。その後、王都クマシやアフリカの王都を考察する際には、都市社会学の都市・村落関係の概念とは異なる、「都市・村落の秩序」としての地域の構造を解説する必要があると論じられる。そして、都市・村落関係をめぐる集落語彙が分析され、王権性という固有の地域概念が抽出される。最後に、都市が「市壁」をもつか否かという観点から王都を類型化した上で王都クマシが考察されると同時に、王都の特質をより明確にするため、その対立概念である商都が比較される。

第2節「王都の構造」では、アフリカの地域の構造から王都をめぐる宇宙論的解釈に焦点が移され、ライデン学派の王都の宇宙論的解釈論や、ウィーン学派の系譜にあるハイネ=ゲルデルンの東アジアの王権の宇宙論的解釈論が考察される。その議論に、ギアツ（劇場国家論）とタンバイア（マンダラ国家論）の国家モデルを接合させて、王都クマシをめぐる宇宙論的解釈が整理される。そして、アサンテ王国の王都クマシを含めた西アフリカの諸王国の王都が、王の中心性、王国の中心性を体現していること



が確認される。

第3節「アフリカの都市と国家」では、まず、フェルナン・ブローデルの『地中海』刊行以後に生じた、「陸地史観」から世界を多島海として認識する「海洋史観」への転換に注目し、環地中海世界、環インド洋世界、環大西洋世界の交流圏との関係からアフリカの諸都市が位置づけられる。その結果、西アフリカ内陸部を支配した古い王国群とは異なる、新しい王国群や都市が14世紀から15世紀にかけてギニア湾沿岸部に誕生したことが論じられる。そして、アサンテ、ダホメー、ヨルバなどのガーナの森林地帯に誕生したこれらの新しい王国群の特質が明らかにされる。本節後半では、ジャック・グディの「生産手段」と「破壊手段」という概念に依拠して、内陸サバンナ地帯では「馬」が、ギニア湾沿岸部の森林地帯では「鉄砲」が国家形成に重要な役割をはたしたという仮説を取り上げ、アサンテ王国形成と鉄砲との関係が検討される。その後、西アフリカのイスラーム史をめぐる諸議論が紹介され、ギニア・サバンナ地帯に発達した「近代」イスラーム国家であるゴンジャ王国と、その中心的な交易都市サラガが論じられる。これは次に議論されるアサンテ王国の特質を明らかにするための布石である。

第4節「アサンテ王国の成立と展開」では、それまでのアフリカ諸王国の形成と展開に関する議論を受けて、アサンテ王国の特質が明らかにされる。その際に、中尾佐助の『栽培植物の起源』から、サバンナ農耕文化と根栽農耕文化の類型が紹介される。そして、稲作農耕文化、雑穀・牧畜複合文化、根菜・根栽農耕文化という新たな農耕文化の類型が提起される。さらに、サバンナ農耕文化と森林農耕文化とが比較される。これは、森林の狩猟国家としてのアサンテの特質を対比的に明らかにするためである。その次に、「森林の狩猟国家」であるアサンテ国家の起源神話に登場する「狩人」伝説が論じられる。アサンテではオジュラ祭という新年の儀礼で、王が「狩人」の衣裳をまもって登場する。最後に、母系の神々の系譜が論じられ、アサンテの口頭伝承の資料にもとづいて、どの王の治世にどの集落がつくられたのかが分析されて、王国の形成史が明らかにされる。

### (3) 第2章「王位継承の方式」

本章では、王権の特質を明らかにするために王位継承問題が論じられる。第1節「王の中心性—聖性と呪力」では、まず、秩序と混沌、空間の秩序、時間の秩序が論じられ、アサンテ王国の「空間」と「時間」に関する秩序と混沌が論じられる。次に、フレーザーの『金枝篇』以来の主題である神聖王、王殺し、偽の王、外来王についての事例が論述される。これらの記述は王権に関する学説史としても読み取ることができる。

第2節「王位継承の系譜」では、従来の王権研究では不十分だったジェンダーの視点からの研究の必要性が論じられる。まず、グディの王位継承モデルを基に、モシ=マンプルシ、ゴンジャ、北アイルランド等の事例がとりあげられ、アサンテの王位継承を事例分析するために必要なジェンダーの視点が論じられる。そして、アフリカ諸社会の女性の地位に関する研究の課題と展望が論じられた後、ジェンダーの視点から王権研究における従来の「男性」中心史観を超えるために、王妃、王女、王母の事例をとりあげて「女性」中心史観の模索が行なわれる。王位継承の方式が「男性」中心史観とは異なり「女性」を中心に据えることで、どのように再解釈できるかその可能性が探られる。ここでも王権に関する先行学説史研究の成果が抱負に利用されている。

第3節「王母の地位」ではアサンテの王母に注目し、まず、王母の系譜・結婚・呪力の観点から王母の地位が論じられる。そこでは、王母位の継承方式が、基本的には直系=垂直(母子)型をとっていること、王母の結婚には、王族の家系を存続させるためのものと、王位継承のためのものがあることが明らか

かにされる。そして、女性の出産と豊穣性とが結びついて、王母が王権を生みだす装置として機能していることが論じられる。

第4節「血の匂いが好きな女神」ではアサンテ王国における女性の位置が論じられる。まず、メアリー・ダグラスの所論が取り上げられ、月経と出産をめぐるシンボリズム、次に、色彩のシンボリズムが検討される。その際、精液と血液を媒介として「男性原理」と「女性原理」がどのように対応しているのかが検討され、アサンテの女の力は「血」の原理を媒介とした儀礼的な側面によるものであること、その「力」の根源は、大地、豊穣、呪術、祖先、血、女という儀礼的な相互の連関のなかにあると論じられる。さらに、性の禁止事項が検討され、「モジャ」（「血液」の意。「精液」の意としての「ントロ」と対比される）が「母系的な族外婚の規則」を核に社会構造の支配的な統合原理となっていることが指摘され、構造的に劣位にあるものが道義的、儀礼的には優位に立ち、政治的な領域では聖なる力を認められているとの解釈が示される。

第5節「王母の法廷」では、王母が実際に国王の法廷で女性の問題をどのように調停するのかに関する最近の研究がまとめて紹介される。そして、王の法廷は相続・継承など国家的領域を扱い、王母の法廷は結婚、離婚、邪術などの家政的領域を扱うことが明らかにされる。以上で、王権の研究におけるジェンダーの視点の重要性が示される。

#### (4) 第3章「王権の儀礼」

本章では、王権が時間と空間をどのように支配・管理するのか、また、葬儀と王位継承の関係が暦のなかで、どのように展開されるのかが明らかにされる。第1節「時と暦」では、デュルケーム以来の時間概念、とくに、エヴァンズ=プリチャード、リーチ、エリアーデ、フォーテス、グディなどの時間論が検討され、生物時計、自然現象、花時計、牛時計など諸民族によって異なる時計と時間観念が整理される。そして、「月」と「年」の単位が、民族ごとに季節的な循環に組み込まれた分節と結びつくことが明らかにされる。

第2節「王権と暦」では、以上の議論を踏まえて、まず、時間の参照体系—自然的現象と人間的現象、生態的な時間、生活暦の項目を基準として、アサンテではどのように時間が概念化されているかが論じられる。そのため、「アグドゥアナン」と呼ばれる「アカン暦」（アカンとはアサンテ、ファンテ、アクアペンなどの諸民族の総称であり、これらの諸民族の暦をアカン暦と呼ぶ）と、季節のサイクルにおいて文化的に規定され、とくに雨季と乾季の移り変わりの時点に開催されたアカンの「オジュラ儀礼」が記述される。次に、ムビティの時間論の視点から、アサンテの「時間」の観念の特色と、王権と暦との関係が明らかにされる。最後に、「運動」概念との関わりで、日の出から日の入まで通常で歩く距離という空間的な基準を基礎に時間を測るアサンテの方式が論じられ、王都を中心とする時間と空間についてまとめられる。このような議論をするのは、一般的にみて、だれが時間や度量衡を含めた各種の尺度を管理し支配するのが、王権の支配構造に関わる重要な問題だからである。

第3節「葬儀と即位式」では、王位継承が葬儀においてどのように視覚化されているのかが明らかにされる。そのため、まず王位継承の方式と王朝の系譜関係が論じられる。次に、歴史的資料に基づいて、王と王母の在位年数が明らかにされる。そして、「王の死」に関しては植物隠喩系の慣用語が使われていることと、その宇宙論的な意味が論じられる。さらに、王の死因について議論した後、王の死後に王の政治的身体がどのように処理されるのかについて、また、王の死にともなう生贄について記述される。最後に、歴史的資料を基に、王の葬儀から即位式までの王位継承のメカニズムが論じられる。

第4節「葬儀の政治学」は、歴史的資料に基づいた記述であった第3節「葬儀と即位式」に対して、民族誌的な資料に基づいた記述である。アサンテ社会の王の葬儀と即位式の記録を実際に収集し、アサンテの民族誌の全体像を描こうとしている。そのため、まず、生と死の世界、悲しみの表現、遺体の処理、髪的神秘性、王の葬儀に関する記述が民族誌のなかでどのように描かれているのかが論じられる。次に、1999年2月25日に崩御したオボク・ワレ2世の葬儀の執行状況について自ら作成した記録を土台に、「王の死」と「死の知らせ」、死せる身体と政治的身体、葬儀とドレスコード、通夜と遺体安置、市場と混沌、新しい王の選出などの項目が記述された後、暦と選日、王の選出から王の襲名まで、王の誕生と「王の母」、王位に就くという王位継承の全体プロセスが明示される。

第5節「儀礼的殺害の論理」では、まず、生贄に焦点が合わされ、ルネ・ジラルールの犠牲論を含めて、社会人類学の犠牲研究が整理される。最後に、犠牲にすること、犠牲行為、犠牲の対象の意味論的な解釈が行なわれ、「人間の生贄」という神話は「未開」「野蛮」という他者像を創る上で大きな役割を果たし、大英帝国の植民地政策の政治的道具として利用されたことが明らかにされる。

#### (5) 第4章「王権の標章」

本章は、王権とその文化的表象に注目する。第1節「文化領域と物質文化」では、森林地帯のアサンテの他に、サバンナ地帯のモシ、ダゴンバ、マンブルシ、カセナ、ゴンジャ、ギニア湾沿岸部のエウェ、ガなどの事例が取り上げられ、文化領域を設定するための指標として重要な「楽器」と神聖王権との関係性が記述される。その後、音の出るヒョウタン、王の鐘、歴史を語る太鼓などの項目に注目し、王権と物質文化の関係が論じられる。

第2節「境界を侵犯する動物」では、アフリカにおける視覚芸術が取り上げられ、とくに、その図像的表現と説話的表現のなかに登場する動物の存在が着目される。その際、アサンテ以外にも、ヨルバ、ベニンなどの王権のシンボリズムが論じられる。それは、言語と図像とを媒介とする〈もの〉を語る民俗の想像力、あるいは〈語り（騙り）〉の共犯関係の深層構造を論じるためである。

第3節「祝祭と王権」ではオジュラ祭礼と王権を標章する物質文化、とくに王の椅子、日傘、語り部の杖、儀礼用刀剣、布と衣裳などの項目が論じられる。以上で、王都からはじまり文化的標章までに至る、アサンテ王国の王権と祭祀の民族誌が終了する。

#### 〔III〕論文の評価

学位申請者の阿久津昌三君は、長年、本研究の主たる調査地である西アフリカ、ガーナ共和国南部のアサンテ王国を対象に、社会人類学（文化人類学）的調査・研究を行ってきた。本論文は、慶應義塾大学法学部政治学科に提出した卒業論文「政治人類学の現代的課題」（1979年3月）以来、阿久津君が王権と祭祀という社会人類学的主題に注目した上で、都市、ジェンダー、国家、政治、儀礼、文化表象などの視点から行ってきた、アサンテを中心にしたアフリカ諸社会の王権と祭祀についての、20年以上にわたるデスクワークとフィールドワーク双方の社会人類学的研究を集大成したものである。これらの主題を調査・研究するために、1981年以来、文部科学省科学研究費等の補助金を受けて、ガーナ共和国において合計24か月、連合王国（英国）において合計14か月にわたる現地調査を行っている。将来的には公開し、調査・研究の成果を広く学界に問うことを予定している。

ところで、本研究の特色は、「政治人類学」の視点を中心にしてはいえ、多角的、多領域的な視点からアサンテ王国を記述していることにある。したがって、本論文は王権と祭祀を中心とする、阿久津君による「アサンテの民族誌研究」でもある。そこには、新しい発見や独自の解釈もみられ、本論

文がもっている民族誌的価値は高く評価できる。

西アフリカの王権に関する日本の社会人類学の研究は、山口昌男東京外国語大学名誉教授のジュクン、川田順造東京外国語大学名誉教授（現神奈川大学教授）のモシ、日野舜也東京外国語大学名誉教授のフルベ、嶋田義仁名古屋大学大学院文学研究科教授のレイ、和崎春日名古屋大学大学院文学研究科教授のバムンなどの蓄積がある。しかし、アサンテに関しては、日本では阿久津君の調査が初めての本格的なものである。本論文は、以上の日本の先行研究はもとより、アサンテに関する文献資料を十分に咀嚼し、アサンテ以外のアフリカ諸社会を比較した上で、アサンテの民族誌的資料の提示とその分析に成功している。これにより、アサンテを中心とした西アフリカの王権と祭祀の実態が明らかになった。

既に記したように、本研究は従来のもものと比べ、都市、ジェンダー、国家、政治、儀礼、文化表象などについて政治人類学の視点から論じているところが、本論文の大きな特長である。また、アサンテ王国の経済基盤を論じるために、農耕文化の類型化をさらに緻密なものにして、アフリカ王国の経済基盤の特質を論じる枠組みを發展させている。さらに、アサンテの王権と祭祀を究明する際に、「ジェンダーの視点」を取り入れ王母の権威に注目してアサンテの王権を論じたことは、アフリカの王権と祭祀研究に大きく貢献するものである。また、第3章第4節「葬儀の政治学」で論じられる「王の死」から「王の即位」までの記述がリアリティに溢れるものとなっている。それは、1999年2月25日に崩御したオポク・ワレ2世の葬儀に運よく立ち会うことができ、葬儀の執行状況をつぶさに実地見聞できたからである。これらが、阿久津君のアサンテの民族史の価値をさらに高めている。

また、本論文の価値は、既に指摘してきたようにアサンテ研究の内部に留まらない。それは「アフリカ」の王権と祭祀研究としても十分通用するからである。また、フレーザー以来の欧米の社会人類学における王権研究の先行学説を明確に意識し、これらの王権研究で提示される主題も充分に考慮してアサンテの民族誌を記述したところに、もうひとつの特筆すべき特長がある。フレーザー、カントロヴィッチ、ホカート、エヴァンズ=プリチャード、フォーテス、グディ、ギアツ、タンバイアなどの王権論が適切な箇所で開催されているため、重厚な先行学説研究ともなっている。さらに、本論文の構成をみてわかるように、四つの章が相互に独立しているとはいえ、体系的に論じられているだけでなく、豊富な図表と写真が利用されてアサンテの民族誌が視覚的にも浮き彫りにされている。

しかしながら、問題点がないわけではない。本論文は阿久津君が「アシャンティ族の権力と象徴」（『民族学研究』第49巻第1号、1984年）で描いたアサンテ研究のデザインを、フィールド調査・研究を踏まえて集大成化したもの」だが、この議論のなかで明らかにされたアサンテの王権と祭祀は、本研究でも明らかにされたように英国植民地主義のもとで再編成されたものであり、現在のガーナ共和国の政策決定において重要な民族的な位置を占めているものである。とするならば、王権と祭祀とが、現代のガーナの政治とどのような関わりをもつのか、それらの間の相互関係についての動態的な分析が行われるべきであった。しかし、そうでないため、アサンテ王国の王権と祭祀の現在の意味が不明確である。その点に不満が残る。つまり、このままでは、現在に生きている過去の遺物としてのアサンテの王権と祭祀の静態的な研究、という性格が強いという印象を受けてしまう。

かつて米国の政治学者デヴィッド・イーストンは、政治人類学には二つの目的があると論じた。第1は、前近代社会の政治現象にことさら注目し、その政治組織・政治行為を記述し分析すること、第2は、現代の政治組織・政治現象を文化人類学の視点から記述・分析することである。本論文では第1の目的が達成されているが、第2の目的は手付かずである。しかし、このことは、本論文の「はじめに」のな

かで「修士論文で描こうとした首長制社会と現代社会との関わりでその動態を明らかにしようという当時の想いは、和田正平編『現代アフリカの民族関係』(明石書店, 2001年)に収録されている論文に発表した。この論文は、わたくしの今後実践しようとする調査・研究の予告である」と述べられている通り、アサンテの王権と祭祀がガーナ共和国の現代政治とどう関わり、相互に影響し合っているのかについての研究は、今後進むものと考えられる。このことから判断するならば、本研究をそうしたきわめて野心的な試みのための基礎研究であると位置づけることが可能である。現代政治の動態的側面に関する調査・研究は今後展開するだろう。

また、本研究のタイトルは「アサンテの王権と祭祀の研究」ではなく、「アフリカの王権と祭祀の研究」となっている。そのため、アサンテの王権と祭祀に関する豊富な記述を基礎に、アフリカ全体の王権と祭祀を論じるという目的がある。それが長所であると既に指摘したが、それはまた欠点ともなっている。つまり、アフリカの王権と祭祀を論じるため、比較の観点から王権と祭祀に関する研究項目のそれぞれにおいて、様々な事例が数多く紹介され検討されるとともに、各研究項目において先行研究・学説が詳しく検討される。それはそれで丁寧な研究だと評価できる。だが、その分、本研究を必要以上に冗長なものとするだけでなく、アフリカの多様な王権と祭祀が紹介されたものの、その整理が不十分だとの印象が残ると同時に、先行研究が到達した研究レベルを超える、あるいはそれらを批判し、オリジナルな視点なり理論・解釈を提出する努力が不十分になったとの思いを査読者全員が感じたことは否定できない。今後、現代のアフリカの王権と祭祀の動態研究を進めるにあたり、議論を整理し、オリジナリティをさらに押し出す努力が必要だろう。

#### 〔IV〕 結論

以上のような点が問題ではあるが、東西冷戦構造の崩壊後もなお大きな政治・社会変動が続いている現代アフリカでは、王制あるいは首長制社会が現代アフリカ政治の権力構造の根幹であることを考慮すれば、本研究は今後の整理と展開の仕方によって、新しい学問的展望を切り開く大きな可能性を秘めている、きわめて重要で重厚な研究成果であることには変わりはない。社会人類学における研究成果として学界に大きな貢献が今後期待できるとともに、高い評価が与えられるであろう。若手研究者が見習うべき研究である。

よって審査員一同は、阿久津昌三君の提出した博士学位請求論文は、博士(社会学・慶應義塾)の学位を授けるにふさわしい内容のものであると判断し、ここにその旨報告する次第である。

博 士 (心理学) [平成 16 年 6 月 9 日]

甲 第 2286 号 増田早哉子

### 顔の認識における既知性効果の検討

〔論文審査担当者〕

主 査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員  
文学博士

渡辺 茂

副 査 日本大学文理学部教授  
文学博士

巖島 行雄

副 査 慶應義塾大学文学部教授